

教育番組における構成要素の意味と 番組構成について

－教育番組のタクソノミー開発への試論－

福田 滋

1. はじめに

放送大学の番組のように、いわゆる「講座番組」と呼ばれる教育番組の映像が、どういう要素から成り立っているか、ディレクターはどのような意図で、その要素をもとに番組構成を行っているか、教育番組のタクソノミー開発への研究のひとつの試みとして問題を提起してみたい。

放送大学では、主任講師が講義の内容について全責任を持っている。

ディレクターが、いわば、番組の企画にあたる講義内容について責任を負うことはあり得ない。しかし番組の構成・演出については、ディレクターに責任の大半がある。このことを前提として、放送大学における番組、つまり放送教材についてディレクターと講師のかかわりを番組構成との関連で考えてみたい。通常、番組制作の世界では、企画と構成は一体のものと考えられている。リサーチとアイデアで練り上げた企画から、最適の要素をもとに番組の構成を考える。企画と構成がそれぞれ分離独立している場合もない訳ではないが、その場合でも構成者としてのディレクターの目で番組の制作は進められる。制作者の個性がかなり色濃く番組に反映されてくる所以である。放送大学の制作システムではディレクターが、いわば番組の企画提案にあたる講義のねらい・内容をどうとらえ、どう解釈し、どう番組として構成しているかということが、基本的に放送教材としての教材性や、情報提供の質、内容といったものを左右する要因となっている。ことの始まりは、ディレクターと講師とのコミュニケーションに帰する所以である。しかし、講師とディレクターという二つの人格が描くイメージは、どこに接点が求められるのか、単に接点というのではなく、全く合い重なることが望ましいが、そういうことはなかなか難しい。では、実際

に放送大学における番組の企画・構成ではどうか、私が制作を担当した放送大学の専門科目『母子保健』の場合を例にとり、この問題を考えてみたい。

2. 番組の形式と構成

昭和58年秋、放送教育開発センターで開催された第3回大学放送教育研究シンポジウム「映像表現の多様性と伝達機能」で、放送大学の専門科目『宗教理論と宗教史』の第12回「死後の世界－天国と地獄－」を題材として、同一講師、同一テーマによる6形式の試作が発表された。6形式とは、1.スタジオ講義形式 2.教室中継形式（カメラ1） 3.教室中継形式（カメラ3） 4.現場中継形式 5.ドキュメント形式（講師の説明） 6.ドキュメント形式（ナレーターによる説明）のことで、それぞれの番組形式について、よさ、わかりやすさ、おもしろさ、学習意欲、迫力などの項目について、受講生の反応調査を行った。その結果、評価が高かったのは、①ドキュメント・アナ②ドキュメント・講師③現場中継④スタジオ⑤教室（カメラ3）⑥教室（カメラ1）の順であった。

講師が顔を出して講義を行う形式よりは、映像構成とナレーションによるドキュメント形式の方が、受講生の評判は良かったことを示している。この調査の結論として、「スタジオは、よくわかるけれども、どうも眠くなってくる、教室中継はおもしろさはあるが、わかりやすさの面で若干劣っている。現場中継は、少し散漫になる、特にいいというわけでもないし、特に悪いというわけでもない、ナレーターのドキュメントは、わかりやすくて学習意欲が一番わいてくる、ただ、ナレーターによるドキュメントは、すべての面ではかよりいいが、大学講義らしくないのが欠点・・・」（『MME研究ノート』6号、67頁）ということが指摘されている。

ここにとりあげた6つの形式については、講座番組の場合、通常単独の形式で制作されることは少ない。たとえば、スタジオ講義形式のなかに、現場中継の映像や、講師の説明によるドキュメント形式を盛り込むとか、講義内容に応じて、いろいろな表現形式を組み合わせ、番組構成にくふうを凝らしている

のが実態である。

黒板とチョークによる学習に、ラジオ・テレビによる学習が取り入れられて以来、教育現場では、数多くの放送教育の研究が進められてきた。

いかにして学習者の理解を深めるか、いかにして学習意欲を起こさせるか、いかにして学習行動を持続させるかといったことは、遠隔教育を主体とする放送大学では必須の課題である。番組形式の研究と合わせて、番組構成の理論と方法の研究が、この課題に対するひとつの答えとなることを期待したい。

3. 番組構成の諸条件

番組を構成する際、ディレクターは、テーマ、講師、素材（映像資料、音声資料）、制作条件（予算、期間、機材、スタッフ）など、さまざまな要因を考慮して、番組構成を考える。

1. 講義のねらいについて、映像的に軸となるのは何か。
2. 講師は、一人か、複数か、講義内容は完成しているか。
3. 放送経験についてはどうか、放送資料の使いこなし方は、慣れているかどうか。
4. 講師のしゃべり方はどうか、巧みか否か。話しのテンポについてはどうか、速いか遅いか。
5. 講義の進め方についてはどうか、原稿を読みながら話すタイプか、原稿から離れて自由に話しが出来るかどうか。
6. 講師は、立って講義を行う方が良いか、座る方がよいか。あるいは座りも立ちもありとする方が良いか。
7. 聞き手または、司会・進行役を設けた方が良いか。
8. 映像資料準備の見通しは、資料の所在はどこか、取材は可能か、取材は、写真撮影か、VTR撮影か、取材に制約はないか、特殊撮影が必要か、その問題点は、（時期、可否、予算など）
9. 著作権上の問題点は、
10. アニメーションやコンピュータグラフィックス作成の必要性は、

ちょっと数えあげても、以上のような問題が指摘される。しかし、これらのことは、どちらかといえば、形式的なことで、難航することもあるが、解決するのは比較的容易である。番組構成上、より基本的に重要なことは、講師は何を考えているか、講義の意図、つまり講義内容に示されたことばの論理や活字の論理には、どのような映像の論理が考慮されているかである。映像については、ディレクターに一任というケースもあるが、仮に一任されたとしても、講義に示された活字の論理から、映像主体の論理を構築するには、ディレクター側に、かなりの専門性などテーマに対する相当の知識、経験も必要である。一任されるか、否かはともかくとして、どこまで映像の論理におきかえて番組を構成することが、意味があり、放送教材としての価値を高めるかという事であろう。そのためには、ことばや活字の特性や映像の特性を十分認識して、番組の構成を考える事が必要である。映像を中心とした放送教材の特色は、活字では表現しにくい具体的な映像を提示できることにあるが、映像には、必要な情報とともに不必要な情報も含まれている。映像は、どちらかといえば表面的、現象的で、映像のもつ意味が、さまざまに解釈される場合があり、映像に加えたコメントが常に正確であるとは言い切れない。その映像が、どんな条件下のものか、映像の撮られた背景なども考慮に入れる必要がある。ディレクターは、映像の持つ制約や、限界を十分考えて、番組構成に当たることが肝要である。その意味で放送教材と印刷教材は、相互に補完しあうという考えかたも考慮に入れて考える必要があるといえよう。

4. 『母子保健』のねらい

放送大学・専門科目『母子保健』（30回）を例に、番組構成に要した映像資料や番組構成のねらいについて考えてみたい。

この『母子保健』については、印刷教材のまえがきに「この母子保健－母子健康科学は新しい学問の研究領域であって、これまでの治療医学、予防医学、リハビリテーション医学、保健学などのいずれの領域とも本質的に異なるものである。いうなれば、生涯健康科学 Life Long Health Science の一部

を構成する」と述べられている。『母子保健』という科目が、既成の学問領域とは異なり、新しい学問領域の開拓をねらいとしているところに、ディレクターの立場からすれば、新しい研究領域の放送教材を制作するという魅力がある。いうなれば、未知への挑戦というパイオニア精神を駆り立てるのである。

また、この『母子保健』の特色は、主任講師の古谷博教授（順天堂大学産婦人科教室教授）を中心に、産科と小児科という専門領域の異なる医師8人の協力により講義案が作成されている点である。講師陣は、臨床医として、極めて多忙な日常の仕事を抱えているにもかかわらず、今回の印刷教材作成と放送教材制作という具体的作業を通して、お互いの交流を深めたことに大きな意義があると考えられる。

ディレクターにとっても、かなり早い段階から討議に加わったことが、企画への参加にもつながり、内容の理解を深めると同時に、制作上の課題を検討し、番組の構成を考える最善の機会となった。『母子保健』の各回のタイトルについても、最終的には、放送番組のタイトルということを考慮して決定されたのもその一つと言えよう。

『母子保健』のテーマ

(原案)	(決定)
1. 母と子の健康科学のねらい	1. 母と子の健康科学のねらい
2. 生命のはじまり	2. 生命のはじまり
－精子と卵子－	－精子と卵子－
3. 受精卵の分割と分化	3. 受精のメカニズム
4. 胎盤の発生と働き	4. 受精卵と胎盤
5. 母体・胎盤・胎児の相互関係	5. 胎児と母体
6. 胎児の発育と自律性	6. 胎児の発育
7. 妊婦のからだと心の変化	7. 妊婦のからだと心
8. 妊婦と環境	8. 妊婦と環境
9. 妊婦と生活	9. 妊婦と生活

10. 分娩のメカニズム	10. 分娩の経過
11. 妊娠・分娩とそれに伴うリスク	11. 分娩と胎児
12. 分娩後の母体の心身の回復	12. 産後の回復
13. 乳汁分泌	13. 乳汁分泌
14. 母乳哺育	14. 母乳哺育
15. こどもとは	15. 子どもとは
16. 胎児から新生児へ	16. 胎児から新生児へ
17. 母と子のふれ合い	17. 母と子のふれ合い
18. 子どもの栄養	18. 子どもの栄養
19. こどもの身体発育	19. こどもの身体発育
20. こどもの運動機能	20. こどもの運動機能
21. 泣き声と言葉	21. 泣き声と言葉
22. こどもの生理機能	22. こどもの生理機能
23. 子どもと個人差	23. 子どもと個人差
24. こどもの発育と病気	24. こどもの発育と病気
25. こどもの健康と環境	25. こどもの健康と環境
26. こどもの健康増進	26. こどもの健康増進
27. こどもと生活	27. 子どもと生活
28. こどもと社会	28. 子どもと社会
29. 集団保育	29. 集団保育
30. 母と子どもの健康を考える	30. 母と子どもの健康を考える

放送番組のタイトルは、簡潔で、明快で、かつ判りやすいものが望ましい。

No.3「受精卵の分割と分化」は「受精のメカニズム」に、No.11「妊娠・分娩とそれに伴うリスク」は、「分娩と胎児」に、No.12「分娩後の母体の心身の回復」は「産後の回復」に修正されたのもそういった理由からである。

5. 番組の構成要素

放送教材の特性を生かした構成とはどういうことか、番組を構成する要素の

意味をどう考えるかということからこの問題を考えて見よう。

まず、『母子保健』で講師が顔を出して話している部分と何等かの資料（映像）を使って説明している部分との割合がどうなっているかを、8人の担当講師についてそれぞれ調べてみた。主任講師の古谷教授と鈴木、伊藤、太田講師は、産婦人科の担当で、奥山、川崎、巷野、高野講師は、小児科の担当であり、それぞれ3～4本の番組を担当している。

表 1. 『母子保健』構成要素(1)

回	4	9	10	13
担 当 講 師	鈴木	伊藤	太田	古谷
講 師	19'06"	19'35"	14'00"	21'10"
(司会ほか)	12'09"	15'09"	13'38"	9'57"
(担 当)	6'57"	4'26"	1'22"	11'13"
資 料 (映像)	23'14"	22'45"	28'20"	21'20"

回	16	21	23	29	30
担 当 講 師	奥山	川崎	巷野	高野	古谷
講 師	20'53"	31'50"	31'44"	21'39"	24'40"
(司会ほか)	13'44"	11'42"	8'02"	12'14"	13'27"
(担 当)	7'09"	20'08"	23'42"	9'25"	11'13"
資 料 (映像)	21'27"	10'30"	10'36"	20'41"	17'40"

主任講師の古谷博教授は、このシリーズの司会・進行役をつとめ、30回の総てに登場して頂いた。このことは、『母子保健』のねらいを「母と子の健康科学」という視点でとらえることと、8人の講師の担当により、テーマの重複や分裂が起こるのを避け、番組としての一貫性を保つねらいがあった。

「母子保健」の番組形式は、冒頭にふれた6形式のなかのスタジオ講義形式に当たるが、司会・進行役の古谷教授は、冒頭で前回との関連や、テーマのね

らいを述べてから、今回の担当講師を紹介する。また、担当講師の講義の要所
要所で、講義のまとめや、問題点を指摘し、学習者に講義内容のポイントを判
りやすく伝える役割をも果たしている。

小児科担当の講師の時に、産科担当の講師にゲストとして参加して頂き、産
科の立場で意見を述べて貰うという方法も取り入れた。番組時間は、開始、終
了タイトルの時間を除けば、42分あまりで、担当講師の持ち時間は、ほぼ30
分である。伊藤、太田、奥山講師は、テレビでのまとまった講義は始めてとい
うことで、なるべく顔を出さないで資料を提示したいという要請を生かし、VTR
取材による映像紹介も積極的にとりいれている。巷野、川崎両講師の場合は、
放送経験が豊富で、話しも大変巧みである。どちらかといえば、資料の説明よ
りは、医療についての考えかたや見かたを伝えることに主眼があり、考え方を
表現するためにマンガ風のイラストを多く使用したことも特色のひとつである。

それぞれの担当講師が、どのような資料（映像）を使用しているかを表にま
とめたものが、次の構成要素(2)である。


1. Pは、パターンや、パネルのことで、内容を大別すれば
 - 1) 文字表示 講義の内容を要約したり、箇条書したもの
 - 2) 統計 統計資料などをグラフ化したもの、
 - 3) 図 医学的な図の表示や模式図など、
 - 4) イラスト（絵） 母子関係などのマンガ風イラストなど。
2. Sは、スライドあるいは写真で、電子顕微鏡撮影の写真など。
3. 模型は、胎児の成長を示したものや、人体各部の医学模型で極めて精巧
に作られている。カラフルで立体感があり、現実感がある。
4. Vは、VTR映像で、今日の医学における最新の医療機器の紹介や、新
しい生命の誕生、誕生直後の新生児の様子、母子相互作用と呼ばれる母子
の交流などを取材したものや、ゲスト講師として参加して頂いた専門家の
話しや資料などである。


表 2. 『母子保』


担当回	4	9	10	13	16	21	23	29	30
担当講師	鈴木	伊藤	太田	古谷	奥山	巷野	川崎	高野	古谷
	(タイトルバック・開始タイトル・開始TM)								
5'	模型		模型						
	P		P	斜線	P		P		P
	斜線	P		P	斜線			P	斜線
10'	斜線				P				斜線
	P			P			P		
	模型					斜線		P	
	P								斜線
	模型				P				
15'	P		P	模型					
						P		P	斜線
		P							斜線
	P								斜線
20'	模型		P		P				
				P		P			
			斜線					斜線	
	斜線	P	斜線				P	斜線	斜線
		斜線							
									斜線
	斜線	斜線	P		斜線	P			斜線

健』構成要素(2)

25'			P						
			S		P				
			P		P			P	
			模型	P			P	VTR	
			P					P	
30'									
		P	模型		VTR		P		
			P						
	P		VTR			P			
35'			VTR	P					
						P			
40'									
44'	(タイトルバック・終了タイトル・終了TM)								
45'	(フィラー)								

 P：パターン（文字，統計，図，イラスト）

 S：スライド（写真）

 模型：医学模型

 VTR

 講師

表3. 『母子保健』構成要素(3)

回	4	9	10	13	16	21	23	29	30
担当講師	鈴木	伊藤	太田	古谷	奥山	巷野	川崎	高野	古谷
P・文字	1	11	13	6	7	7	1	15	0
P・図	3	4	10	3	7	0	1	0	0
P・統計	6	0	0	3	6	2	0	0	2
P・絵	2	0	2	1	1	1	7	0	0
スライド	6	0	2	0	3	0	0	0	0
医学模型	3	0	3	1	0	0	0	0	0
V T R	12'	12'	7'	1'	7'	55"	2'	16'	16'

6. 構成要素をどう使いこなすか

この番組構成要素(2)は、8人の担当講師の担当する回について、44分の講義の流れを追ったもので、1分ごとにどういう構成要素で講義を進めているかを示している。担当講師が、およそ30分の持ち時間をどのような資料に基づいて講義しているかを見ると、映像資料の取り入れ方により講師の個性を認識することが出来る。さまざまな構成要素を活用して、資料中心に厳密な講義を進める講師、専ら、文字パターンを多用して、それぞれの項目に含まれる内容の説明に力をいれ、概念の定着を図る講師、VTR映像の提示にかなりの時間を割き、映像の持つ感性への働きかけに期待する講師、医療的項目の説明よりも、マンガ風イラストを活用して、医療的考えかたや、注意すべきポイントなどを指摘することで放送教材の特性を意識した講義を進める講師、電子顕微鏡による撮影や、マウスによる人工受精の様子を、途中幾度かの失敗を繰り返しながら、目にみえないものをいかにして見せるかをくふうし、映像資料の作成に時間をかける講師のように、番組の構成要素に対する取り組みも、一人一人違っている。ディレクターが、講師とのコミュニケーションにおいて、最も心すべきことは、講師のパーソナリティを理解して、講師の個性にあった番組構

成を行うことである。講師の持ち味を生かした番組制作を進めることが、優れた講座番組制作の秘訣と言うことが出来るように思う。何故ならば、ラジオやテレビは、出演する人の人柄を正直に伝えるからで、その人のパーソナリティが、講義に説得力があるかどうかと関係があるからである。番組構成要素(3)は、各要素の使用数を示したもので、VTRについては、トータルの時間数を示してある。ゲスト講師の場合、講義部分と資料部分を含んでいる。

7. 構成要素の特性

ここで、注意すべき点を幾つか指摘しておきたい。番組の構成要素には、資料の提示のしかたで、講師がコントロール出来るものと、コントロール出来ないものがある。講師はこのことを十分承知して、資料を使いこなすことが必要である。パターン、スライド、模型などは、講義内容の都合に合わせて、自由に提示方法をコントロールする事が出来るのに対し、VTR資料やアニメーションなどは、映像にあわせて説明しなければならない。つまり、講師は映像をコントロールすることが出来ない。また、文字パターンなどを表示する際、受像機から、個人が読み取れる字数は、例えば、引用文の縦書きなど、縦8～10字、横10行ぐらいで、横書きも、横10字～12字、縦6～8段の表示が基準であるということ。またグラフの表示も、細かい数値は、読めない。部分的にクローズアップするか、グラフそのものを簡略化して表現することが必要である。図の表現方法で陥りやすいのは、図としての完成度を期すために細かい説明を全部書き入れることがある。説明には不要な部分は割愛することを考慮しないと、肝心の表示を読むことが出来ない。このような図の提示は、意外に多いものである。年表、地図、表、統計など意外にテレビ画面では、表現に失敗することが多い。全体と部分の表示というのは、まだまだくふうが必要であり、講師にとっても、ディレクターにとっても、せっかく作成した資料が最後の段階で十分理解されないというのは、残念なことである。これらの資料は、資料の提示方法という点で、見た感じと異なり意外に難しい資料である。

8. 映像構成の課題

また、構成要素のなかで、講師が原稿や原図を提供する資料と、講師の要請に従って、VTR取材を行い、編集して仕上げるVTR映像による資料とでは、同じ資料でも、講義内容との関連で、ディレクターが占める役割は、ほかの構成要素とは、かなり意味合いが異なっている。講師にとっては、この映像資料が自分の意図に沿った映像として構成されているかどうかということは、基本的なことであるが、これ等の資料には、あたかも自分の手にあって、手がない不安がある。

初期の生放送だけという時代に、NHKの学校放送番組が直面した幾つかの課題のなかで、事前に内容の予知できない教材は、果たして教材かという現場からの指摘がある。このことが中学・高校でのテレビによる放送教育の普及を妨げた最大の理由である。今日のようにVTRの普及した時代では、そうしたことでケンケンガクガク議論したことも懐かしい話である。教材としてのVTR映像の作成には、資料内容の正確さとともに、映像構成されたもののトータルなイメージや感性に訴える映像特性がもたらす人間感情への働き掛けを無視することは出来ない。講師が、VTR取材にすべて同行し、編集作業にすべて立ち会えば、内容についての不安は解消されるが、実際は、待ち時間などの多い取材などの時間的ロスが多く、撮影や編集作業のすべてに参加することは現実的ではない。VTRの映像構成は、他の資料と違って、講師とディレクターのコミュニケーションが最も必要とする部分であるが、映像構成については、カメラの目いいかえればディレクターの目が、番組の完成度とも関連して、ディレクターの個性を著しく示すところである。

『母子保健』の構成要素で、VTR映像がねらった教育効果や、制作上の配慮というのは、次のような点である。

- (1) 最新の医学情報を伝える。胎児の様子を画像でとらえる超音波診断装置や（この撮影時には、妊娠期間の異なる妊婦6人の協力を得た。）また出産時の胎児と母体の安全に役立っている分娩監視装置の紹介。（帝京大学医学部付属病院）

(2) 妊婦と分娩をめぐる情報の扱い。出産の取材については、当初、まず困難と考えられていたが、担当講師と妊婦の協力を得て、陣痛から分娩、新生児誕生、母子対面というプロセスを撮影出来た。母子ともに実に順調で、いわゆる安産であったことも、取材のケースとしては、誠に幸運であった。

(帝京大学医学部付属病院)

(3) 新生児や幼小児の特徴をとらえる。この点は、新生児の身体的、生理的特徴の取材や、零歳児から年長児までの保育活動、幼児の健康診断の取材にもいろいろと協力の得られたことが、講義内容と直結した的確な資料の充実に役立った。(葛飾赤十字産院、多摩市・こぐま保育園、愛育病院)

(4) 14人に及ぶゲスト講師の協力が得られ、VTR取材により、貴重な資料も含めて、取材協力が得られたことは、専門的分野に関する最新、最適の情報を得るとともに、番組内容の一層の充実強化に貢献したといえよう。

このシリーズでは、VTR映像が番組の構成要素として、かなり意味を持っている。最新の医学情報も、医療機器の装置だけでは、その意義は伝えられない。超音波の診断装置も初期、中期、後期の妊婦の協力がなければ、画像を通して、意味のある実際の変化を伝えることは出来ない。今回の取材では、個人のプライバシーをまもりつつ、映像を構成していくという点で、従来の取材にはない配慮が必要であった。

9. 番組構成のひとつの事例

第30回「母と子どもの健康を考える」は、シリーズの最終回ということで、21世紀に生きる母と子どもの健康を考えようという構想であった。この回は、これまでの回とことなり、ディレクターが企画・構成のかんりの部分を受け持った事例として、その経緯と実際に触れてみたい。この回は、当初、担当講師全員により、それぞれの担当した回の補足や今後の課題を語ってはどうかという意見があったが、第1回で提起した最近の乳幼児死亡率激減の背景を探ろうという基本構想を生かして、母子保健の推移、保育器の変遷、B型肝炎等の予防医学の普及、小児医学の課題などを軸として、番組の構成を立てようという

ことになった。構成に必要な内容の取材なども、印刷教材は番組収録後作成するという方法で番組制作を進め、番組構成に当たった。番組構成の骨組みは次の通りである。

第30回「母と子どもの健康を考える」の構成。

- (1) 今日の日本の医学、医療の進歩は目覚ましい。とくに乳幼児死亡率は世界最低であるその背景には、何があるか。(統計・古谷博教授)
- (2) 終戦直後の日本の子どもの生活は(終戦直後のニュース映画から)
- (3) 医療先進国としての日本(最近の進んだ医療施設)
- (4) 産婦人科領域について、医学史からみた日本の医療(VTR取材・医学史・酒井シヅ助教授)
- (5) 江戸期の産科・賀川流(同)
- (6) 産科と近代医学(同)
- (7) 今日の産婦人科の医療・超音波診断と分娩監視装置(VTR・古谷博教授)
- (8) 小児科と保育器の歴史(VTR取材・馬場一雄教授)
- (9) 未熟児問題(同)
- (10) これからの保育の課題、からだの病気から心の病気へ(小児科・巷野悟郎教授)
- (11) 21世紀の母と子の健康を守るために(古谷博教授・巷野悟郎教授)

10. 結び

『母子保健』の最終回は、ねらいが、比較的明快で、判りやすくまとめることが出来たように思う。番組の構成も、歴史を縦の軸としたことで、第1回で提起した日本の医療技術、医療設備の進歩の背景への理解を助けたということが出来る。生命の誕生から、胎児期、分娩、新生児期、幼児期、小児期、と『母子保健』シリーズ全体の流れを見ていくと、この時期がいわば、人間のあゆみの原点であり、この子どもたちが21世紀の国家、産業、学術、文化の担い手であることを考えると、改めて深い感銘を受ける。

ディレクターに感激がなければ、良き構成も、良き番組も生まれない。

番組は構成によって多様な構成が可能であり、それぞれが十分意味をもっていることを考えて番組制作を進めたい。そしてその基本が、放送大学の番組では、講師とディレクターの良きコミュニケーションにあり、質の高い優れた放送教材を生み出すには、番組要素の特性を十分生かして、番組構成を考えることが、番組制作の基本であることを強調してこの稿の結びとしたい。